

ハードルの係

藤白 幸枝

もうこの仕事をやめようかと思っていた。始めた頃は、単純作業で高収入、特別公務員という肩書も気に入っていた。でも今は違う。正直本当に今すぐやめてしまいたい。そう思っていた。しかし、簡単ではなかった。僕の仕事は人の人生にとって非常に必要な役割があったからだ。僕が設置するハードルとは、

僕の職業は『ハードル設置係』だった。

扱うハードルは陸上と同じ形をしたあの、ハードルと全く同じだ。それを決められたトラックの上に並べる。作業自体はそれだけ。ただ一つ違うのは、その『トラック』とは、人の人生（命）であり、そして僕が設置するハードルとは、そのトラック上、つまり人生上の試練になるものなのだ。

担当するトラックは出勤した朝に配られる設置カードに記載されている。一つのトラック（人生）に対し、数名の担当が年齢のセクション別に分かれてハードルを設置していく。人は、そうやって置かれた一つ一つのハードルを越えながら成長し、生きていくのだ。

この仕事の勤務歴が割と長い僕は、最近、ハードなセクションを任される事が多くなっていた。それは、十二歳から十五歳までの期間だった。

人によってハードルの大小は違うが、一応、生命が誕生する時には同時に終了の予定も組み込まれて生まれる仕組みになっている。そこから逆算し、越えなければいけないハードルの配分があって、それを預かり僕らが設置するのだが、まさに、この三年間にとんでもなく多い、または重い、痛い、苦しみを伴うハードルを置かなければならない場合がある。その役割を、ここ最近僕が一人で任される事が多くなっていたのだ。苦しみを設置するのなんて、誰だって辛い。正直限界だった。

僕は、今日のこの仕事を最後に移動、もしくは最悪、辞職を申し出ようと考えていた。こういうハードな職場はもっと鈍感な性格の者がやる方がいい。僕には荷が重すぎた。

ハードルを運び、作業開始地点に立つと、トラック主の十二歳の誕生日が見え

た。とても幸せそうな彼と家族の笑顔が見えた。僕はこの幸せのすぐ先に爆弾の様なハードルをいくつも置かなければならなかった。

ハードルの設置順は基本決められていない。それは担当の設置係が自分の判断で置く事になっていた。質、量、重さ、大きさ、それらのバランスを絶妙に考え、調整し、うまく乗り越えさせるのが、ハードル設置係の腕の見せ所とも言われた。もちろん、トラック主本人の素質もあるが、多くの挫折の原因は、ハードルの設置のセンスの問題だ。それくらい、大変な責任を担っているのだ。

僕は、ハードルの種類をじっくり慎重に眺めながら、少年のトラックの上にならず、病気のハードルを置いた。これから彼は長期の入院をすることになる。僕は置いたハードルを少し遠巻きに眺めた後、やっぱりそのハードルをトラックの外に出した。病気は彼の家族にも関わるハードルだ。それを最初に置くと、家族のトラックの調整も必要になるので、非常に難しい。病気はもう少し後に回すことにした。

他のハードルを確認してみた。しかしそこには、更に辛いハードルしか用意されていなかった。

親しい人との死別、災害、裏切り……。こんな重量の重いものを、何もこの年齢の時に味わなくてもいいのに。僕は心底思った。そして、その場に座り込んだ。

「人に苦しい思いをさせる仕事だったら、こんな仕事選んでいなかった」

ため息と一緒に愚痴をこぼすと、背後から声を掛けられた。

「おい、何をさぼってるんだ」

振り向くとそこには一番尊敬する、上司の姿があった。丁度いい、今日この仕事最後にこの部署を離れさせて欲しいと言おう。僕は立ち上がり「あの少しお話良いですか」と上司に言った。上司は「もちろんだとも」と言って僕のとなりに座った。僕もまた座った。

僕は、人を苦しめる為に働くのはもう嫌だ、と上司に告げた。上司は、苦しめているのではなくて、成長させているのだ、とそれを否定した。

「でも、僕がもし、ハードルを置かなければ、彼は苦しまなくて済むのです。明るく楽しいままの人生を幸せに送って行けるのです。人の苦しみを無責任に扱う事などできません。この仕事をやり続けるのが辛くて仕方が無いのです」僕は、必死に上司に訴えた。すると上司は立ち上がり、

「きみこそ、人の人生に対して無責任じゃないのかね？仕事の途中なのでもう行かなくては。しかし、きみ、きみは大切な事を忘れてしまっているようだね。きみが辞めたって何も解決しないのだよ」と言って立ち去ってしまった。

僕は、少し考えたあと、どうしようもならない現状を受け入れるしかないと思いを直した。とにかく、今は彼のハードル置かなくては、自分の苦しみは終わらない、とそう思った。再び彼のトラックと用意されたハードルを眺めると、なんだから自分の気持ちと重なった気がした。

（本当に苦しいハードルだけど、どうせ置かならせめて、彼が幸せになれる設置をしよう。はじめは辛いけど必ず、その先で幸せになれるように）

僕は一つ一つのハードルに向き合いながら、まるで自分事のように胸を痛めた。けれど、幸せになって欲しいと願うからこそ、そのハードルが彼にとって、ただの苦しみにならないよう向き合った。何度苦しくなっても、今度は痛みから目を逸らさなかった。可哀そうではなく、幸せを願った。

全てのハードルを並べ終え、僕は次の担当へ設置カードを引き継ぎ今日の作業を終了した。

しばらくトラックのとなりで座って並べたハードルを眺めていた。きっと苦しく辛い日々が待っているだろう。激しく並んだハードルを見れば容易に想像できた。しかし僕は思った。これを全て超えた彼の人生はきっと素晴らしいものになるだろうと。僕は、彼の幸せを願っていた。

立ち上がり帰り支度へ向かった。途中、上司が担当するトラックが見えた。なかなか、過酷なハードル配置だった。ハードルを並べる上司は涙を流していた。僕は大きく手を振って上司を激励した。上司はそれに気づき同じように大きく手を振り返してくれた。そして設置しているハードルを指さしてこう叫んだ。

「よくやった。でもまだ超えなきゃならないハードルはいっぱいあるからな」
上司が作業していたのは僕のトラックだった。そしてまた、そんな役割を担った上司のトラックにも、誰かがせっせとハードルを設置している事だろう。